

審査の結果の要旨

氏名 田中 瑛津子

学習内容に興味・関心を持ち、主体的に取り組む学習者を育成することは、学校教育の大きな目標の一つであるが、現状において児童生徒の学習に対する興味は十分に育まれていないことがさまざまな調査から指摘されている。本論文は、とくに、中学生の理科に対する興味に着目し、興味の深さの捉え方、深い興味を育む授業設計について検討したものである。

1章では、興味の深化を「時間的持続」「内容本質性」「価値志向性」の3つの軸から捉える「鼎様相モデル」を提案し、それに基づいて先行研究の知見を整理している。2章では、興味を内容本質性・価値志向性の観点から測定できる質問紙の開発を行った。因子分析の結果、理科に対する興味は6種類の因子から構成されることが明らかになり、6尺度が作成されたが、これらは感情的興味と価値的興味に大別され、価値的興味にあたる「思考活性型興味」と「日常関連型興味」は、内容本質性および価値志向性の軸において深い興味であると考えられた。しかし、それらの尺度得点の低さから、生徒たちに深い興味は十分育まれていないことが示唆された。3章では、2時点のデータを用いた統計的分析により、個人差特性である意味理解志向が価値的興味と相互に正の影響を与えていること、感情的興味はそのような相互関係をもたないことが示され、授業内容を既有知識や日常場面の現象と結びつける授業方法が深い興味を育てるのに有効ではないかとしている。

4章から7章では、地域の中学2年生を対象とした複数の実験授業を通して、日常関連型興味を育む授業設計について検討している。4章では、導入時に浅い興味を喚起しておくことで、深い興味への介入が有効になることを示した。5章では、介入の効果の個人差に着目し、意味理解志向の低い生徒に対しては、教師が日常例を提示したり日常との関連性を強調したりすることに加えて、日常的な問題を解決する機会を生徒に与えることが有効であることを明らかにした。6章では、授業の具体的目標として、生徒自身による説明課題を提示しておくことで、動機づけ側面と認知的側面の両方が促進されることを示した。そこで、これらの知見を踏まえ、7章では次のような授業設計を提案している。まず、導入時にその日の講義の内容の本質を理解することで説明が可能になるような、身近な現象を扱った発展課題を提示し、その解決と説明を授業の具体的目標とする。その後、日常例を挙げながら解説を行い、授業の後半には、導入時に提示された発展課題に協同的に取り組む活動を入れる。この設計原理に基づく実験授業を行った結果、参加者の日常関連型興味をかなり持続的に高められることが示された。

以上のように、本研究は、興味の深さの意味を明確にした上で尺度化を試み、さらに、深い興味を育むための具体的な授業設計を提案しその効果を検討したものであり、興味に関する学術的研究および教育実践に貢献できる可能性を有していると考えられる。したがって、本論文は博士（教育学）の学位論文として一定の水準に達していると認められる。